

文学に夢中になって

岡田光世

私は高等部から青山学院に入った。高校は都立に行く決めていたが、母は青学へ行ってほしがった。どちらにするか迷っていると、祖母が「お寺に行って、おみくじを引きなさい。行きたい都立に行かせてくださいとお祖師様にお願ひし、吉が出たら、そうしなさい」と言った。

祖母は信心深い日蓮宗の信者だった。青学がキリスト教とは、口が裂けても言えなかった。お寺へ行き、おみくじを引くと、凶が出た。何かの間違いだろうと、もう一度引くと、また凶が出た。

おみくじのお陰で縁があった青学は、私にあらゆる面で影響を与えた。

高等部で夫と出会い、キリスト教に触れ、のちに洗礼を受けた。在学中に高校、大学と2度、アメリカに1年間ずつ留学した。ここではとくに、英米文学科での学びが、私の人生にどう生かされたかに触れたい。

昨年、イギリスを訪れ、Virginia Woolf の家を探し歩いた。ようやく見つけ、その前に佇んだ時、驚いたことに涙が溢れてきた。神山妙子先生のゼミで、*To the Lighthouse* や *Mrs. Dalloway* の原書を一語一語、丁寧に読んだ25年前の記憶が一気に蘇り、懐かしさがこみ上げてきた。

長年アメリカに住み、自分の体験や取材をもとに、作家・エッセイストとして本を書いてきたが、もともと英語教師になりたかった。同時通訳、福祉の仕事にも興味があった。

高3の時、密かに温めていたアメリカ留学の思いを、家族に告げた。西洋嫌いの封建的な家庭で、祖母にはよく「ピアノなど弾くな。三味線を弾け」、「女に教育はいらない」と言われた。当然、留学するなら縁を切って行けと猛反対された。「そうします」と答えたものの、留学には家族の許可が必要で、「渋谷の東邦生命ビル（当時）から飛び降りる」と遺書まで書いた。ついに祖母は諦め、アメリカの高校に1年間、留学した。

留学のお陰で日常会話には困らなくなったが、進学した青学の英米文学科で、広く英語力を身につけるために、音声学、同時通訳、英会話、文学史など、どれも楽しく学んだ。その後、「英語で書きたい」と思うようになったのは、文学と writing の授業の影響が大きい。とくに宮部菊男先生は、「Composition I」で、ひとりひとりのニーズに合わせ、英語の writing をきめ細かく指導してくださった。

神山先生や小山敏三郎先生、田中啓史先生、Francis J. Bosha 先生のもとで、Woolf や Forster、Hawthorne、Faulkner、Hemingway などの作品を丁寧に読み、解釈することで、文学の楽しさを知ったばかりでなく、作家が言葉を組み立て、作品に仕上げる過程を学んだ。先生方ご自身が、作品や作家に寄せる熱い思いがひしひしと伝わってきた。作家の生活についても、時折、興味深く話してくださった。学科での勉強の傍ら、障害者の国際大会や重度障害児施設でボランティアもした。

大学4年の時、青学の協定校 Ohio Wesleyan University に1年間、留学した。ここは当時の大木金次郎院長が学んだ大学だ。文部省（当時）から奨学金が出たので、「国の命令」で行かなければならないと、祖母を説得した。同大学で私が最も興味を持ったのが、短編や詩を書く Creative Writing だった。英語が母国語ではなく、日本語でさえ短編など書いたことはない私を、担当教授は歓迎してくれた。初めて書いた短

編“Red Crocus”が大学文芸誌に掲載され、最優秀賞を受賞した。青学で文学の楽しさを知り、いつしか自分でも書いてみたいという思いが生まれていたのだ。外国語だからこそ、言葉を選び、作品を作り上げる創作の喜びを強く感じた。

Advanced Composition の教授に、「国際理解」をテーマにした全米の論文コンテストに応募するよう、勧められた。文学と歴史の授業ばかりで読む量が多く大変だったが、「自分の授業の宿題は免除するから」と言われて応募した論文が1位に選ばれた。短編も論文も、書いたのは留学して間もない頃だから、これは青学で鍛えられた成果だろう。

OWU の教授の勧めで、アメリカの大学院で Creative Writing を学ぶことにした。Creative Writing では短編や詩を提出し、それが合否の大きな決め手となる。当時はレーガン政権で、外国人対象の奨学金はカットされた。とはいえ、大学院の学費まで親に頼れず、あえて奨学金付きの枠で入学申請したところ、幸い授業料全額免除になった。

New York University の大学院では、著名な作家、E. L. Doctorow 氏が教えていた。小山先生の「米国文学史」や「米文学特講」などで、繰り返し名前と作品が取り上げられた作家だ。修士論文は自作の短編集で、同氏が指導教員だった。

大学院を終え、読売新聞の現地紙で2年間ほど記者をした。時間をかけて取材する特集記事を多く書かせてもらった。刺激的な日々で、無駄な言葉を削ることなど多くを学んだが、より掘り下げて自分が書きたいものを書いていきたいという思いが強くなり、辞めた。

その後、米国の文化や社会について、岩波新書にまとめ、『世界週報』（時事通信社）などの雑誌や新聞に発表し続けた。さらに、私が原作を書いた英語漫画が8年間、新聞連載され、書籍化された。その傍ら、黒人やヒスパニックの子供たちに半分ボランティアで日本語を教えた。

最近、英語交じりのエッセイ集を出している。私は海外でも見知らぬ人とよく言葉を交わすが、文化や国を越えて「人間は面白い」と実感

している。「人は皆、不完全で愛おしい存在である」と思えるようになった。拙著について新聞の書評などで、「人への眼差しが温かい」、「著者は人間が好きなのだ」とよく評されるが、本当だとすれば、本学科で熱い情熱を持った人間性豊かな師のもとで、文学を読み、登場人物の喜びや苦しみ、悲しみを自分のこととして受け止め、人を包括的に捉え、理解することを学んだからだろう。

各大学が今、生き残りをかけ、「異文化」、「国際」などをキーワードに、学科を立ち上げている。英語のスキルを習得することは、専門学校でもできる。文学にはトレンドや時代の流れに囚われることのない深い魅力がある。人が豊かに生きるために、文学は不可欠だ。実学志向が高まるなか、英米文学科は文学の面白さや知的感動を共有し、学生自身が自分の人生や生き方を考え、悩み、生きる喜びや希望を見出せる精神の泉のような場であってほしい。そのためには学生が受身でなく、より積極的に関わり、活発に議論できる雰囲気が必要だろう。

専門を絞って、集中的に学べる環境は、魅力的だし大切だが、それ以前に英語全般の基礎力を徹底的につけたい。とくに読解力や文章力がなければ、伸びない。さらに英語圏の文化や英米文学の幅広い知識、それ以外の教養をまずは身につけるべきだ。英語でより広い層に直接、自己を表現する喜びを味わえる Creative Writing も注目したい。

私も遅ればせながら、英語でも日本語でも、創作に本腰を入れたいと思う。紆余曲折した私に、OWUの先生方は「早く書きなさい。作品を待っている」と叱咤激励し、神山先生も「これまで書いてきた蓄積があるのだから」と励ましてくださる。本学科で、そしてここで学んだからこそ縁があった協定校で、30年近く経った今も見守ってくれる師に巡り会えたことは、人生最大の宝だ。

あの日のおみくじに、私は心から感謝している。